

境界領域で＜私＞が形成される物語としての古事記中巻（Ⅳ） —景行記：主体的なく私＞の誕生と＜相手の内側の私の存在＞についての問い—

岩橋宗哉¹⁾

〔要旨〕

本論文では、文学、民俗学等の知見を踏まえつつ、対象関係論的精神分析の観点から、古事記中巻の景行記を検討した。景行記は、＜モノ＞神的性情を自ら内に抱えながら、天皇によって＜語り出されたコト＞を現実化するための役割を担った境界の人物ヤマトタケルが、内側にある＜私を超えた＞モノである欲動を制御しつつ、外側の＜モノ＞神とそれを記する者を服属させてゆく物語である。垂仁記で誕生した＜私＞が以下の点でさらに形成される過程が示されている。＜私＞の内側にあるモノである欲動を＜語り出されたコト＞によって制御すること、＜語り出されたコト＞に対して主体性を獲得すること、＜語り出されたコト＞の背後に＜私＞に向けられた「相手の内側での私の存在」という問いを発見すること、その問いに対しては、離別と再会を繰り返して互いにより存在として認識してゆくことにより乗り越えられること、＜私＞に対して＜私を超えたモノ＞が存在し、それを軽視することは死につながることを、どのようなよい対象であっても＜私＞は離別せざるをえないことである。

キーワード：主体性 対象の内的世界 対象喪失

Ⅰ. はじめに

古事記中巻は、次の3つの物語に分けることができる。

- 1) 万能的思考に基づく言事一致のコトの論理が維持される物語、
- 2) コトの論理は衰退し、境界領域で＜私＞が形成されてゆく物語、
- 3) 先の未来を展望し、人々の秩序の維持のために、コトの論理とは異なる原理を模索する物語、

である。

2) は垂仁記と景行記である。垂仁記では、過去の祭政一致的な支配体制からそれらが分離される新しい支配体制へと移行する時間的な境界領域をめぐる物語が展開し、景行記では、空間的な境界領域を拡張してヤマト平定を完成させることをめぐる物語が展開する。2) の物語は＜私＞が形成されてゆく物語であるが、ここでの＜私＞とは北山（2001）の＜私＞論に基づいている。北山は、裏と表、内と外、「あれ」と「これ」を別けながら渡すのが＜私＞と定義している。

本論文では景行記について検討する。

Ⅱ. 景行記

1. 景行記のあらすじ（1）

景行天皇は、二人の少女が、その容姿が整って美しいと聞き確かめられて、天皇の御子の大碓命を遣わして、宮中にお召しになった。ところがオホウスノ命は、自分自身がその二人の少女と結婚して、さらに別の女を捜して、偽って天皇に献った。すると天皇は、それが別の女であることをご存じになっていつも物思いにふけるばかりで、結婚なさることもなく、悩んでおられた。

天皇が、小碓命（；大碓命の弟で、倭建命のこと）に「どういうわけで、そなたの兄は朝夕の食膳に出て参らないのか。よくおまえからやさしく教えさとしなさい（専ら汝ねぎ教へ覚せ）」と仰せられた。五日たってもオホウスノ命は出て参らなかった。そこで天皇はヲウスノ命に、「どうしてそなたの兄は久しい間出て参らないのか。もしやまだ教えていないのではないか（もし未だ誨へずありや）」とお尋ねになると、「とくに教え諭しました（既にねぎつ）」と申しあげた。天皇が、「どのように教えさとしたのか（如何かねぎつる）」と

¹⁾ 福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

仰せになると、「夜明けに兄が厠にはいった時、待ち受けて捕え、つかみ打って、その手足をもぎ取り、薦に包んで投げ捨てました」と申しあげた。

そこで天皇は、ヲウスノ命の猛々しく荒々しい性情を恐れて（建く荒き情を惶みて）、「西の方に熊倉建が二人いる。彼らは朝廷に服従しない無礼な者どもである。だからその者どもを討ち平らげなさい（その人等を取れ）」と仰せられた。その頃のヲウスノ命は、御髪を額のところと結っておられる少年であった。ここにヲウスノ命は、叔母の倭比売命の御衣と御裳をいただき、剣を懷に入れてお出かけになった。そして、クマソタケルの家にやって来てご覧になると、その家の周辺には、軍勢が三重に囲んでいる中で、室を造っていた。そして新室の完成祝いの宴を開こうと言いわいで、食物の準備をしていた。それでヲウスノ命は、その辺りを歩き回って、その祝宴の日をお待ちになった。

さてその祝宴の日になると、御髪を少女のように垂らし、叔母からもらった御衣と御裳を着て、すっかり少女の姿に変装して、女たちの間にまぎれ込んで、その室の内にはいっておられた。すると、クマソタケルの兄弟二人は、その少女を見て可愛く思い（見感でて）、自分たちの間に座らせて盛んに酒盛りをした。そこでヲウスノ命はその祝宴の最高潮を見計らって、懷から剣を出して、クマソの袴をつかんで、剣を胸から刺し通された。そのとき、弟のタケルはこれを見て恐れをなして（見畏みて）逃げ出した。ただちに追いかけて、その室の階段の下に追って行き、その背の皮をとらえて、剣を尻から刺し通された。その時クマソタケルが申すには、「その刀を動かさないでください。私は申し上げたいことがあります」と申した。そこでヲウスノ命はしばし許して、クマソタケルを押し伏せておられた。

そこで、クマソタケルは、「あなた様はどなたでいらっしゃいますか」と申したので、ヲウスノ命が「私は纏向の日代宮においでになって大八島国をお治めになっている、オホタラシヒコオシロワケノ天皇の皇子で、名は倭男具那王である。おまえたちクマソタケルの二人が、朝廷に服従しないので無礼だと天皇がお聞きになって、おまえたちを討ち取れ（取殺れ）、と仰せられて私をお遣わしになったのだ」と仰せになった。

そこでクマソタケルは「まさにそのとおりでございましょう。西の方には我らを除いては、強く強い者はおられません。ところが大和国には、我ら二人にまさって強く強い男子がおいでになったのです。それで私はお名前を献りましょう。今後はヤマトタケルノ御子とたたえ申しましょう」と申し上げた。ただちにクマソタケルを斬り裂いてお殺しになった。その時からお名前をたたえてヤマトタケルノ命という。そうして、大和へ帰って来られる時に、山の神、河の神、また海峡の神をみな服従させ平定して（皆言向け和して）、都にお上りになった。

そこでヤマトタケルノ命は出雲国にはいられて、その首長の出雲建を討ち殺そうと思ひになり、到着されるとすぐに親しい友情を交わされた。そして密かに

木で偽の大刀を作り、それを帯びて、イヅモタケルと肥河で沐浴なされた。ヤマトタケルノ命が先に川からお上がりになって、イヅモタケルが解いておいていた大刀を取って佩き、「大刀を取り換えよう」と仰せになられた。それでイヅモタケルも川から上がって、ヤマトタケルノ命の偽の大刀を身に着けた。

そこでヤマトタケルノ命は、「さあ、大刀合わせをしよう」と挑戦しておっしゃった。大刀を抜くときに、イヅモタケルは偽の大刀を抜くことができず、ヤマトタケルノ命はイヅモタケルを討ち殺してしまわれた。その時のお歌に

やつめさす 出雲建が 佩ける刀 黒葛さは巻き
さ身無しにあはれ
（イヅモタケルが腰につけている大刀は、鞘に葛をたくさん巻いてあって見かけは立派だが、刀身がなくて、ああおかしい）

このように追い払い平定して、都に上り復命された。

注：次田真幸全訳注「古事記（中）」講談社学術文庫をもとに作成。神名・人名は初出のみ漢字表記、以降はカタカナ表記とした。（；）内は説明、（）内は原文を示す。以下のあらすじについても同じ。

2. 景行記のあらすじ（1）の考察

（1）＜語り出されたコト＞^{注1}の裏に隠れる未知なる真意

地方豪族が、その妹や娘を天皇に差し出すのは、国魂を天皇の身に魂振りして服属を誓う、呪術的儀礼であった。都倉（1981）によると、そのような女性を寝取ったオホウスの行為は、国魂の横領であり、「おのれのエロスのままに王権の論理を無視」し、「王権奪奪の志向」をもった「王権秩序のはみ出し者」である。天皇は、ヲウスにそのようなオホウスを「ねぎ教え覚せ」と命じる。それに対して、ヲウスは兄の手足をもぎ取り薦に入れて捨ててしまう。

この命令の中にある「ねぎ」は「労ぐ」つまり「慰撫する、いたわる」を意味するから、「ねんごろに教え聞かせよ」という命令である。西郷（2005）は「痛めつけることを可愛がる」というように、「ねぐ」もそのような含みを持つ言葉であり、天皇の言葉を「逆手にとって小確は、兄をこのように手厚く扱った」と理解する。天皇の言葉を利用して、ライバルである兄を殺したというのである。それに対して、森（1985）や稲生（2010）は、天皇のやさしく教え覚えなさいという「真意がのみ込めず己れの性情である＜建＞に引きつけて誤認解釈をしてしまった」と理解する。これらの理解では、いずれの理解であれ、天皇は「やさしく教え覚えなさい」と述べていることを前提としている。一方はそれを理解した上で、ヲウス自身の欲求に沿って

あえて言葉の意味を拡大解釈して惨殺したとする。もう一方は、言葉を自らの性情に沿って理解したために真意そのものを捉えそこなつたと見なしている。

天皇の真意を「寛容と仁慈」溢れるものであるという前提に立つ考え方に対して、都倉（1981）は、天皇の「寛容と仁慈」を理解せず、力によって決着させようとするヲウスも、法に支えられた絶対的権威に向かおうとする王権にとっては異端であり、王権の浄化のために、異端（オハウス）を異端（ヲウス）によって排除するという論理が働いているという。この論理では、「やさしく教え覚えなさい」という寛容と仁慈の裏には、異端、つまり異なるものを排除しようとする意図が隠されていることになる。畠山（2011a）も、「やさしく教え覚え」という言葉には「事を穏便に済ませたい思い」もあって表面上巧みに隠されているものの、その深層には「肅清への思い」があったのではないかという。そして、畠山（2011a）は、ヲウスは天皇のオハウス肅清への思いを見抜いたのであり、「的確に状況を判断し、人の心と言葉を深く読み取れる切れ者だった」と理解する。このように、「ねぎ教え覚え」という＜語り出されたコト＞とそれへのヲウスの反応については、いくつかの解釈が可能である。そして、それらの解釈は、天皇の真意を推測し、それを前提としている。

しかし本論文では、ヲウスが天皇の真意を受け取れなかったと理解することも深く理解できたことと捉えることもしない。それはテキストには記載されていない天皇の真意を予め解釈して、それに基づいてヲウスの行動を理解することになるからである。天皇の真意は、ヲウスと同じように私たちにもわからないものとして、天皇によって、＜語り出されたコト＞に対して、どのようにヲウスが反応してゆくのかを本論文では検討していきたい。

天皇の真意はいつまでも未知のままである。ただし、天皇によって＜語り出されたコト＞の理解に基づいたヲウスの行動を、天皇がどのように受けとったかは次の＜語り出されたコト＞によって示される。そして、天皇によって＜語り出されたコト＞に対するヲウスの行動を判断する時には次の二つの観点があるであろう。一つめは、ヲウスが＜語り出されたコト＞の通りに行動しているか、そこからずれるかを判断する観点である。もう一つは、＜語り出されたコト＞からのずれが天皇にとって受け入れられているか受け入れられていないかを判断する観点である。ヲウスの行動はこの二つの観点から評価できるはずである。その判断の結果として示される次の＜語り出されたコト＞には、天皇の心の中のモノ^{注2}がまた少し現実化されている。そして私たちも、その観点によって、その時々のヲウスの行動を天皇の立場に立って内省して判断し、＜語り出されたコト＞とヲウスの行動との関係を評価できるのである。

（2）外なる＜モノ＞神的人間—クマソタケル—と内なる＜モノ＞神的性情

ヲウスのオハウスへの対応を知って、天皇は、「建く荒き情」を恐れる（惶^{かしこ}む）。その性情は、＜モノ＞神的である。岩橋（2014a）でも触れたが、＜モノ＞神のはたらきは、荒々しく・激しくて、過剰であり、人を怖じ畏れさせるもの（佐藤,2005）である。ヲウスの性情はこれを思い起こさせる。天皇はこの性情を服属しない無礼なクマソタケル兄弟に向けるために征討を命じる。中央にとどめるのではなく、境界領域に赴かせるのである。古事記中巻においては、ここまでは、＜モノ＞神は、外部にあるものであり、それをコトによって、制御するという構図であった。ヲウスは＜モノ＞神的性情を自らの中に抱え込んでいる存在である。ヲウスは内なる＜モノ＞的性情を制御しつつ外なる＜モノ＞にコトを向けて服属させることが求められる境界の人物なのである。

また、過剰な力能を備えたくなにものか＞である＜モノ＞神は、私たちの欲動が投影されたものであった。その意味で、この状況は、外に投影されていたものが内側にも認められるという状況を表現しているとも理解できる。

（3）＜語り出されたコト＞による内なる＜モノ＞神的性情の制御

天皇によって＜語り出されたコト＞の背後にあるモノは、まず、恐れであり、しかしその性情を熊襲征伐に利用しようとする意図である。また、天皇からそのようなヲウスに＜語り出されたコト＞は「その人等を取れ」である。「取れ」は殺せという意味であり、また、服属させる対象には「荒ぶる神」は含まれず、クマソタケル二人の「人等」に限られていることも注意したい。しかし、そのような境界領域にやることも、恐れを感じてヲウスを遠ざける意図もあるのかどうかはわからないままである。

ヲウスの叔母ヤマトヒメは伊勢神宮の最高神女であり、ヤマトヒメから頂いた御衣と御裳は伊勢神宮の神威を備えたものである。ヲウスは、ヤマトヒメからの御衣と御裳を身にまとうことで女装し、伊勢神宮の神威も加わって、クマソタケルを征討する。

ヲウスがクマソタケルの征討を行うのは、新嘗祭（稲の収穫祭）の新築祝いの日であった（畠山,2011a）。この祝祭では、歌舞と同時に一夜の性的な交渉を伴う（畠山,2011b）。女装したヲウスをクマソタケルが、「見感でて」二人の間に座らせたのは、そのような対象として選ばれたからであり、美少年であったことを示している。ヲウスは宴がたけなわとなった時に、兄の胸から剣を刺し通して惨殺する。それに対して、弟の方は、「見長みて」と表現されているように、美しい乙女の姿をしたヲウスの裏側からいきなり、＜モノ＞神のような「建く荒き情」が出現したことに驚き恐れる。名を尋ねられた後、ヲウスは「ヤマトヲグナミコ」を名のっているが、ヲグナは「童男」であり少年という意味だが、同時に「童」は神秘的な力が宿る「尋常ならざる存在」を指す場合に使われるという（畠山,2011a）。ヤマトヲ

グナノミコと名のつた後、クマソタケルによって名付けられている。これは、畠山 (2011a) をはじめ、多くのものが指摘しているように、収穫祭に伴う成人式の「名替え」であり、少年がこれによって成人したことも示している。それも、ヲウスの性情を表現し、服属しないクマソの性情をも表現している「建」ということばが、クマソによって奉られるのである。このように「建く荒き」服属しない人等をヲウスの元来の性情である「建」によって服属させることに成功する。

クマソタケル征討においては、ヤマトタケルの「建く荒き情」は、天皇の意図通りに＜語り出されたコト＞の現実化に役立つ形で、機能している。そして、＜語り出されたコト＞を復唱する時に、「取れ」を「取殺れ」と言い換えたところに、ヤマトタケルの振る舞いが「建く荒き情」によって＜語り出されたコト＞を越えてしまうことが暗示されているが、その情は制御されているのである。

(4) ＜語り出されたコト＞と主体性の発揮

クマソタケルを征討した直後に、ヤマトタケルは、山の神、河の神、また海峡の神をみな服従させ平定して（皆言向け和して）都にお上りになった、と書かれている。言向けとは、服従しないものに対して、言葉によって、服従を誓う「言」を自らの方向に向けさせることである（神野志, 1975）。ヤマトタケルは山や河、海峡などの境界領域にいて通行を妨害する荒ぶる神を服属させたのである。これは神を服属の対象にしているから天皇によって＜語り出されたコト＞からずれている。しかしここでは、言向けと和という字が使われており、武力を背景にして従わせる「平」は使われていない。言向けすることによって荒ぶる神を鎮め和らげたということであろう（森, 1985）。つまり、天皇のコトを逸脱して神を対象にしているが、成人したヤマトタケルは「建く荒き情」を制御し、言葉によって荒ぶる神を鎮め和らげ服属させることに成功しているのである。

また、命令されていないイヅモタケルを謀略によって征討している。当時はこのような騙し打ちが悪いことではなくむしろ知恵があることを示すもので、智略にたけていることは、英雄の条件の一つである（西郷, 2005）。この征討によって、ヤマトタケルは、ヤマトヒメを通じた伊勢神宮の加護を必要とせず、独力で、それも智略を用いて、「建く荒き情」を制御しつつ用いながら、まつろわぬ人を平定している。そしてそこで歌われる「見かけは立派だが、刀身がなくて、ああおかしい」というヤマトタケルの歌は、自分自身とその偽物の大刀を対比的になぞらえながら、自らの力を謳歌しているようにも受け取れる。本物の＜モノ＞神的な「建く荒き情」という大刀の中身も備えており、かつ知略によって中身と見かけの間を制御して、独力でまつろわぬ人を平定できる能力を獲得している喜びが示されているのではないかと思う。ヤマトタケルの喜びの頂点の一つは西征の最後のこの場面にあると思う。

また、コトに対する主体性の始まりは、＜語り出されたコト＞とその背後の未知である真意あるいは意図との間にできる境界領域で＜私＞がその真意あるいは意図を理解しつつ行動できるようになることではないだろうか。天皇の西征の命令の裏には、ヤマトタケルに対して、「まつろわぬ神には建く荒き情を制御して、言向けできるようになりなさい。まつろわぬ人に対しては、建く荒き情を用いて服従させなさい」という真意ないし意図があったとしたら、ヤマトタケルの行動は、西征の命令として＜語り出されたコト＞の内容からは逸脱するがその意図の方向には一致し、認められることなのである。サホビメのようにコトの内容そのものを現実化するのではなく、そのコトの意図が示す方向性を把握してそれを現実化しようとするのが主体性である。方向性に従ってコトを現実化するために、個々の判断には、自らの理解による裁量加わる。相手からのコトに対して主体的になれるということは、コトの背後への注目がおこり始めているといえるだろう。

以上の西征までを簡単にまとめてみると、まず、天皇から兄を「ねんごろに教え覚え」と＜語り出されたコト＞に対して、ヤマトタケルは兄を惨殺する。天皇はその＜モノ＞神的な「建く荒き情」を恐れると同時に、その情を境界領域にいるクマソタケルに向けるように征討を命じる。ただし、クマソタケルというまつろわぬ人等というように、神は除外し、平定の対象を人に限定し、それも対象をクマソタケルのみに限定した命令である。天皇の命令自体が、ヤマトタケルの「建く荒き情」の制御の役割を果たしている。その課題に対して、伊勢神宮の加護も得て成功する。ここで＜語り出されたコト＞の現実化は終えている。しかし、さらに境界領域にいる神を言向けによって鎮め和らげることと、独力で智略を用いてまつろわぬ人を平定することに成功している。これらは、＜語り出されたコト＞から逸脱したことであり、かつ、「建く荒き情」を制御することでヤマトタケルが獲得した能力を主体的に用いたことによる。＜語り出されたコト＞から逸脱した主体性の発揮が天皇にどのように評価されるかは、天皇によって次に＜語り出されたコト＞によって暗示される。

3. 景行記のあらすじ (2)

そこで天皇は、また重ねてヤマトタケルノ命に、「東方十二カ国の荒れすさぶ神や、また服従しない人々を平定し従わせよ（東の方十二道の荒ぶる神、まつろわぬ人等を言向け和平せ）」と命じて、御組友耳建日子という人を副えて遣わされる時、終の長い矛を授けられた。

それで、東国に下って行かれる時、伊勢の大神宮に参って、神殿を礼拝し、やがてその叔母のヤマトヒメノ命に申されるには、「天皇は、まったく私を死んでしまえばよい、と思っておられるからでしょうか（天皇

既に吾を死ぬと思ほすゆゑか）、どうして、西の方の悪い人々を討ちに遣わして、都に返り上って来てから、まだ幾らも時が経っていないのに、兵士らも下さらないで、こんどはさらに東国十二カ国の悪者どもの平定にお遣わしなされるのでしょうか（悪しき人等を平けに遣はすらむ；ただし「平け」を「ことむけ」と読むことは問題で「むけ」と読むべきという考え方（寺川, 2012）があり、筆者も同意見である）。これによって考えますと、やはり私など死んでしまえ、と天皇はお考えになっておられるのです」と申されて、嘆き泣き悲しんで出で立たれる時、ヤマトヒメノ命は草那芸剣をお授けになり、また袋をもお授けになって、「もしも火急のことがあったら、この袋の口をお開けなさい」と仰せになった。

そして、尾張国に到着して、美夜受比売の家にお入りになった。そこで、ミヤズヒメと結婚（婚ひ）しようとお思いになったが、またここに帰り上って来たときに結婚しようとお思いになって、結婚の約束をしてお出かけになって、ことごとく山や川の荒れすさぶ神々、また服従しない人々を平定しお従え（言向け和平し）になった。

そして相模国にお着きになった時、その国造がヤマトタケルノ命をだまして「この野に大きな沼があります。その沼の中に住んでいる神はひどく強暴な神でございます」と申し上げた。そこでその神をごらんになるために、その野にお入りになった。すると国造は火をその野原につけた。ヤマトタケルノ命はだまされたとお気づきになって、叔母のヤマトヒメノ命の下さった袋の口を解いて開けてごらんになると、火打石がその中にあった。そこでまず御刀で草を刈りはらい、その火打石で火を打ち出して向かい火をつけて、燃え迫ってくる火を退けて、その野を無事に出て、その国造どもをみな斬り殺して、火をつけてお焼きになった。

そこからさらにお進みになって、走水海（；浦賀水道）をお渡りになろうとした時、その海峡の神が荒波を立て、船をぐるぐる回して、命は先へ渡って進むことができなかった。すると、その後の名は弟 橘 比売命という方が申されるには、「わたくしが皇子の身代わりとなって海中に身を沈めましょう。皇子は、遣わされた東征の任務を成し遂げて、天皇にご報告なさいませ」と申しおいて、海に入ろうとする時、菅笠を八重、皮笠を八重、絹笠を八重、波の上に敷いて、その上にお降りになった。

するとその荒波は自然におだやかになって、御船は先へ進むことができた。そこで後のお歌になった歌は、

さねさし 相武の小野に 燃ゆる火の 火中に立ち
て 問ひし君はも
（相模の野原に燃え立つ火の、その炎の中に立って、私の安否を尋ねてくださった我が夫の君よ）

である。それから7日経って、その後の御櫓が海岸に流れ寄った。そこで、その櫓をとって、御陵を作っ

てその中に納め葬った。

ヤマトタケルノ命は、さらに奥へお進みになって、ことごとく荒れ狂う蝦夷どもを平定し、また、山や川の荒れすさぶ神々を平定し（そこより入り幸して、悉に荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して）、都に上る時、足柄山の坂の下に到着して乾飯を召し上がっているところに、足柄峠の神が白い鹿になって、やって来て立った。そこで、すぐに食べ残された藁の片端を、待ち受けて鹿に投げつけられると、その目にあたって、鹿は打ち殺された。

そして、ヤマトタケルノ命は、その坂の上に登り立って、三たび嘆息なさり、「ああ、わが妻よ（あづまはや）」と仰せになった。それでその国を吾妻（東）という。その国から越えて甲斐の国に出て、酒折宮においでになった時に、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる
（常陸の新治や筑波の地を過ぎてから、幾夜旅寝をしただろうか）

と歌われた。すると、夜警の火を焚いている老人が、命のお歌に続けて、

日日並べて 夜には九夜 日には十日を
（日数を重ねて、夜は九夜、日では十日になります）

と歌った。

信濃の坂の神を帰順させて、尾張国に帰って来られて、ミヤズヒメの家にお入りになられた。命にお食膳をさし上げる時、そのミヤズヒメはお杯を捧げて献った。このとき、ミヤズヒメの着ている褌の裾に月の障りのものがついていて、それで、その月の障りを見て命が御歌に、

ひさかたの 天の香具山 鋭喧に さ渡る鵲 弱細
挽や腕を 枕かむとは 我はすれど さ寝むとは
我は思へど 汝が著せる 褌の裾に 月立ちにけり
（天の香具山の上を、鋭くやかましく鳴きながら渡ってゆく白鳥よ。その白鳥の頸のように、かよわく細いなやかな腕を、枕にしたいと私は思うけれども、あなたとともに寝たいと私は思うけれども、あなたの着ておられる褌の裾に、月が出てしまったことよ）

と歌った。ミヤズヒメはこのお歌に答えて、

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの
年が来経れば あらたまの 月は来経行く
諸な諸な 君待ちがたに 我が著せる 褌の裾に
月立たなむよ
（日の御子よ、我が大君よ。時が経って過ぎて行けば月も来て過ぎてゆきます。いかにもいかに、あなたのおいでを待ちきれなくて、私の着ている褌の裾に月がでてしまったのでしょうか）

と歌って、結婚し、草那芸剣をミヤズヒメのところにとどめて、伊吹山の神を討ち取るために（取りに）お出かけになった。

4. 景行記のあらすじ（2）の考察

（1）＜語り出されたコト＞の裏の真意が暗示する＜相手の内側の私の存在＞

西征の成果を受けて天皇はヤマトタケルに「東方十二カ国の荒れすさぶ神や、また服従しない人々を平定し従わせよ（東の方十二道の荒ぶる神、まつろわぬ人等を言向け和平せ）」と命じる。西征の時の命令とは、大きく異なる。まず、「取れ」というのではなく「言向け和平せ」であり、平が入っていることで武力を背景にした行為であるにせよ、言葉によって服属させることを強調している。また、対象はクマソタケルという限定された「まつろわぬ人等」のみではなく、「荒ぶる神」と「まつろわぬ人等」である。これは、ヤマトタケルが西征によって、身につけた能力を評価して、言向けに対するヤマトタケルの裁量を拡大して命令を下しているとみなすことができる。というのは、境界領域にいる神を言向けることも、指示されていなくても自ら判断して「まつろわぬ人等」を選択することもすでに西征で経験済みのことである。この命令に対して、ヤマトタケルは、ヤマトヒメに「天皇は、まったく私を死んでしまえばよい、と思っておられるからでしょうか（天皇既に吾を死ぬと思はずゆゑか）・・・」と嘆き悲しんで胸の内を伝えている。それは、帰還するとすぐに東征の命令が出たことと、兵士が与えられなかったことによる。

この部分の解釈についても、父子の対立を前提として、ヤマトタケルは「秩序の外に追われ、やがて死なねばならぬおのが定めを思い知らされる」という運命の自覚を読み取る解釈（西郷,2005）がある。その一方で、天皇は神や人等を「言向け和平せ」といっているのに、ヤマトタケルは「人等を平けに遣はすらむ」といい「言」に対する認識にずれがあり、それは「建く荒き情」によって天皇の命令を理解し損っているためであるという解釈（森,1985; 稻生,2010）もある。また、榎本（1992）は、天皇は東征を通じてヤマトタケル自らが「建く荒き情」を矯正することを期待したのに、その真意を読みとらなかったと解釈している。いずれも、父子の対立や「建く荒き情」が＜語り出されたコト＞の拡大解釈や誤解を招くという前提のもとにヤマトタケルの発言を解釈しているように筆者には感じられる。すでに考察したように、西征の結果をもとに次に天皇によって＜語り出されたコト＞はヤマトタケルの西征における振る舞いを否定するのではなくむしろ評価し、ヤマトタケルに「言向け和平す」裁量を与えるものである。そして、後に述べるようにヤマトタケルもそれに応えて、東征を進めている。しかし、一方で、ヤマトタケルが言うように天皇は、ヤマトタケルを近くに置きたくないのではない、死んでしまえばよいと思っているのでは

ないかと疑う余地もある。「死んでしまえばよい」と思っている根拠としてヤマトタケルがあげている疑問点も理解できることである。しかし、「天皇は私のことをどう思っているのか」という問いが向けられた天皇の真意については、ここでもやはり、未知のままなのである。

筆者は、古事記上巻の考察の中で、うつろう現実に対する未知の感覚を宿している現実認識について触れたことがある（岩橋,2013c）。それは、現実には孔があいていて、そこから現実に対して何が溢れてくるかは未知のままでいる認識である。その孔を何らかの思考などで塞いでしまわずに、未知のままにしておくことが、うつろう現実やその中の＜私＞を認識するためには必要である。現実とはうつろうのであり、その現実の孔から溢れてくるものに触れて、私たちの心のうつわの孔からも情緒や思考や面影が溢れてくる。未知のままであると認識していることで、現実や心のうつわにうつろいながら溢れてくるものについて認識できる。現実の孔から溢れてきたものと、心のうつわから溢れて来たものは、互いにウツシ（移し、映し）あい、互いが互いをうつし出し合いながら、それぞれが一つの時間の中でうつろってゆく。春先の菜の花を見て、私の心の中の何かがそこに写し出され、菜の花が咲いている現実がうつろうことで、そこにまた何かが私の心のうつわに溢れてくる。そのようにうつろう現実の中で、現実には溢れる何かと、私の心に溢れる何かがつろってゆく様子を、未知の認識を維持することで認識しやすくなる。

それと同様に、相手から＜語り出されたコト＞の裏側には、真意と呼ばれる未知が溢れる孔があいていると認識しておくことが＜語り出されたコト＞とその裏側にあるモノの認識には必要である。ヤマトタケルの「天皇は私のことをどう思っているのか、死ぬかと思っているのか」という問いについての答えは、＜語り出されたコト＞に明示される内容の中にはなく、うつろな孔として暗示され、それは未知である。そう認識することが重要であると思う。しかし、ヤマトタケルはその孔に触れて、内側の心のうつわの孔から悲しみが溢れて、「私など死んでしまえ、と天皇はお考えになっておられるのです」という思考によって孔を塞いでいる。筆者は天皇による東征の命令としての＜語り出されたコト＞によって、ヤマトタケルに「自分の裁量をもって、十二国の荒ぶる神とまつろわぬ人等を言向け和平せ」という課題と「相手の内側では私はどのような存在としているのか」という問いが向けられる孔がもたらされたと理解したい。「ねぎ教え覚え」や西征の命令を受けた時には、このような孔は認識していなかった。例え「ねぎ教え覚え」の真意についての疑問が生まれたとしても、それは問いなおせば明確になる疑問で、＜語り出されたコト＞の内容に明示された意味についての疑問であった。ところが、東征の命令についての真意という孔に対する問いは、最終的には、相手の内側では私はどのような存在かという関係性についての問いである。そして、ここではその問いが生まれたのである。関係性についての問いを相手に向けて質問し、

次の＜語り出されたコト＞によって答えられたとしても、明示された内容の裏に再び関係性についての新たな問いが生まれる。つまりいつまでも未知である。未知のまま関係性は、二人の内側をうつし出しながら、うつろってゆく。

ヤマトヒメは、ヤマトタケルの「私など死んでしまえ、と天皇はお考えになっておられるのです」という認識に対して何も言わないし何もしない。ヤマトヒメは、ヤマトタケルの心のうつわの孔から溢れだした嘆き悲しみのうつわとなりながら、西征のときと同じく、伊勢神宮の神威を持つ呪物である火打石の入った御袋と草那芸剣を渡すのである。つまり、課題の遂行を支援するのである。

（2）東征の構造—二つの課題が交差する物語—

鈴鹿（2011）は、垂仁記でタジマモリが常世国よりもたらし「時じくの香の木の実」である橋を名に負ったオトタチバナヒメは「常世の姫」であるという。そのヒメが身を捧げて海を渡らせた先は、「常世国であり、国名でいえば、日出づる国＜常陸＞に他ならない」という。この説をとるならば、東征は、古事記上巻で繰り返された異界訪問の物語と捉えることができる。上巻の異界訪問であるイザナキの黄泉国訪問、スサノヲの高天原訪問、オホナムチの根堅洲国訪問、ホフリの海神宮訪問はいずれも、課題を持っている男神がそこを訪れることで、その課題を克服する能力を獲得する物語である。また、その主な舞台は、異界であり、異界に行くまでの道行はほとんど描かれていない。しかし、ヤマトタケルの東征を異界訪問と捉えるなら、上巻のそれと大きく違って、異界でのことではなく、異界までのまた異界からのことが物語となっている。異界でのことは、「ヤマトタケルノ命は、さらに奥へお進みになって、ことごとく荒れ狂う蝦夷どもを平定し、また、山や川の荒れすさぶ神々を平定し（そこより入り幸して、悉に荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して）」と記述されているのみである。この記述は、天皇によって＜語り出されたコト＞つまり東征の命令を、一和平が平和になっていること以外はほぼそのまま忠実に現実化していることを示しているだけである。

このように東征は、異界での物語ではなく、異界との境界領域を渡る物語なのである。また、境界領域という観点から見ると、ここまでの中巻の中では、境界領域を渡ることとは一方通行であり、行って戻るという描かれ方はしていない。しかし東征においては一方通行ではなく、伊勢から常陸およびその奥までは行きと戻りが対になり、その道行で離別や再会が物語られる。ただし、最後に大和までは戻れないので、大和から伊勢までは一方通行であり、伊勢から大和までの帰路が死出の旅路として描かれる。

またこの東征を異界訪問と捉えるなら、ヤマトタケルはどのような課題をもっており、それがどのように克服されるのであろうか、また、されないものであろうか。

一つには、天皇によって＜語り出されたコト＞が示しているように、「建く荒き情」を制御して「自分の裁量をもって、十二国の荒ぶる神とまつろぬ人等を言向け和平せ」という課題であろう。しかし同時に、「相手の内側での私の存在」についての問いをめぐるもう一つのテーマが並行しており、かえってそれが前面に出てくる。それは相手との間での自分の存在感についての課題である。そのテーマは天皇によって＜語り出されたコト＞に対する問いかけとして生まれたが、東征の中では、ヤマトタケルが出会う女性との間に引き継がれて、その問いは答えられる。

このようにみると東征は、ヤマトから異界まで行って戻る一本の道行であり、空間的な境界領域で、「建く荒き情」を制御して「自らの裁量で言向け和平せ」という課題を遂行する場である。しかしその一方で、同じ道行を、往路と復路と捉えると、その道行は、離別から再会までの時間的な境界領域を渡ること、相手の内側における自分の存在を認識する場となる。つまり、東征は「自らの裁量で言向け和平せ」の課題の裏側に、「相手にとって私はどういう存在か」という問いをめぐるテーマを伴っている。そして一つめの課題は主に物語の地の文の中で語られ、二つめの課題は主に歌として表現される。

（3）「建く荒き情」を制御して「言向け和平せ」を現実化する課題

ヤマトタケルは、伊勢でヤマトヒメから御袋と草那芸剣を賜って、尾張でミヤズヒメに会う。帰路で再会し結婚する約束をした次の道行で、荒ぶる神や服従しない人等を「言向け和平し」ている。次に相模で、国造にだまされて窮地に立つが、ヤマトヒメから賜った呪物に助けられて、国造ら服従しないものを力で平定している。次に走水海で「渡りの神」が行く手を妨害するのに対して、オトタチバナヒメが自ら渡りの神に身を捧げ犠牲になることで、渡りの神を和らげ鎮めている。ここで異界との境界領域を渡り、異界に侵入し、荒ぶる神や蝦夷等を「言向け和平す」。往路であるここまでは、天皇によって＜語り出されたコト＞から逸脱することなく忠実にそれを現実化している。

そして、尾張までの帰路における「言向け和平せ」の課題については、足柄の坂の神である白鹿との遭遇と信濃の坂の神の「言向け」が描かれているのみである。信濃の坂の神に対しては言向けであるので、天皇によって＜語り出されたコト＞の現実化である。しかし、足柄の坂の神に対してはどうであろうか。異界に行くために走水海という境界領域を渡ったが、この足柄の坂は、異界から戻るために越えなければならない境界領域である。ヤマトタケルは、坂の神である白鹿の目に食べ残しの蕨を投げて殺す。これに対して、西郷（2005）は、足柄の坂の神を抑えることと東国を征することとは不可分の関係にあったといい、白鹿の白が霊的なものを表しているからといってここでもそれを示していると決めるのは性急であるといい、むしろ東国への通

路を確保する行動と捉えている。しかし、森（1985）は、この場面について「タケルはコトムケという祭祀を軸とする古代的共同体から離脱して、個の中に埋没してゆく」といい、「言向け」でない行為を強調し、そこに、共同体からの離脱と個に向かう傾向を読み取る。森がいうように、ヤマトタケルの行為は「言向け」とは言い難い。ここまで、力によって神を殺すことはなかった。走水海を渡る時は、和らげ鎮めたのである。しかもその坂の神は走水海の渡りの神のように荒ぶる神であるという記述もされていない。言による鎮撫や服従を誓わせる交渉もなしに、服属するのかもしれないのがわからぬままに、食べ残しの蒜で不意に殺したのである。この神への対応は「言向け和平せ」というく語り出されたコト>を逸脱しており、しかもその在り方は「建く荒き情」の表現として読み取れるのである。

そして、ミヤズヒメとの再会後、伊吹山の神を「取り」に出かける。取るという言葉は、天皇が西征への命令として、クマソタケル等を「取れ」と使った言葉であり、殺すことである。景行記では「言向け和平す」と対照的に使われてきた言葉である。ここまで草那芸剣の神威に支えられて東征できたのに、草那芸剣をミヤズヒメのもとに置いて「取る」ということは、伊勢大神の神威を軽んじていると同時に、伊吹山の神を侮っている。＜私を超えるモノ＞を想定しないこのような傲慢な態度にも「建く荒き情」が見え隠れする。ヤマトタケルは自らの＜モノ＞神的な「建く荒き情」に高揚しているかのように、自らの力を過信して、＜私を超えるモノ＞を想定しなくなる。彼は足柄の坂本で最初に「神を殺した人」となったが、このような観点から、私たち現代人を顧みると、私たちはみな彼の子孫なのである。

（4）「相手の内側での自分の存在」についてのテーマ——離別と再会——

天皇によって与えられた、「言向け和平す」という課題には、その背後に「天皇は私のことをどう思っているのか」という問いを生み出す未知の孔を伴っていた。言のやり取りは、意味内容の伝達のみではなく、その背後に未知の孔も暗に示すことになることは臨床場面でよく体験することでもあるし、また、テーマとなることである。しかし、相手がどう思っているのかを相手の口から聞いたとしても、そこには疑いが影を落とす。それはことばによって意図的に伝達されることなく、ことばがいつも明示している内容の陰で暗示されることだからである。二者関係に積極的に注目する対象関係論的精神分析では中心的となるこのテーマが、古事記中巻では、ここに最初に登場する。

ヤマトタケルは、天皇によって＜語り出されたコト＞によって芽生えた孔についての悲しい胸の内をヤマトヒメに打ち明ける。それに対して、ヤマトヒメは表側の＜語り出されたコト＞の課題一言向け和平す—を支援する呪物を授ける。＜語り出されたコト＞の実行に向けて支援するのである。しかし一方で、東征の構

造で触れたように、ミヤズヒメ、オトタチバナヒメとの間で交わされる歌を伴うやり取りを通して、ヒメたちの内側で、ヤマトタケルがどのような存在としているのか、また、ヤマトタケルの内側で、ヒメたちがどのような存在としているのかが示される。そして、実感を伴う自らの存在についての認識によって、ヒメたちとの関係の中で支えられる。

まず、オトタチバナヒメが登場し、ヒメは走水海の渡りの神を鎮めるために犠牲になる。その時の歌は、相模でヤマトタケル自身が謀略の火に囲まれて窮地に立っている時でさえ、オトタチバナヒメのことを忘れず、安否を尋ねてくれて自分を大切に思ってくれるヤマトタケルの面影がオトタチバナヒメの内側にあることをはっきりと示している。ヤマトタケルのために死に向かうオトタチバナヒメの内側で、ヤマトタケルがよい存在としていることがはっきりと示される。

そして、ヤマトタケルは、犠牲になったオトタチバナヒメの面影に支えられて、異界で「言向け和平す」課題を遂行し、成功—足柄の坂の神を除いて—する。筆者がそう考えるのは、異界から帰還する時に、足柄山の坂の上で「ああ、わが妻よ」と三度嘆息する時、走水海に入水する時にあの歌を詠んでいるオトタチバナヒメの面影が現われていると思うからである。三度の嘆息は、ヤマトタケルの内側で、オトタチバナヒメがよい存在としていることと、そのよい存在との離別の痛みを示している。オトタチバナヒメの歌とこの嘆息は対なのであって、異界への行きと帰りの境界領域で表現されたものであり、異界を経めぐっていた間中、ヤマトタケルの内側にその面影があったと筆者は考える。

酒折宮は、坂から降りてきた所であろう。そこで常陸からの日数をヤマトタケルが問いかけ、老人がそれに答える歌は、異界を経めぐってようやくこちら側の世界に帰ってきた「いわば時差ボケのような朦朧とした意識」に対して、すかさず答えて「こちら側の意識に目ざめさせた」という鈴鹿（2011）の理解がある。ここで、異界からの境界領域を渡り戻ったということである。

次に、ミヤズヒメが登場する。ヤマトタケルとミヤズヒメは、東征の実質的な出発点・帰着点（青木, 1989）である尾張で、一度出会う。ヤマトタケルは、ミヤズヒメという名が示すように、「御合わず」（西郷, 2005）—結ばれず—に帰路に再会を約束して東征に向かっていた。東征の実質的な帰着点に戻った時に、歌が交わされる。長い年月が経過して、約束通り戻って来て結ばれようとする時に、今度は、月の障りが襲^{よづめ}の楯に月のように出て、また待ちわびることになるのか、こんなところに月が出ている、と月経についてヤマトタケルは歌う。鳥が詠まれており、上巻のヤチホコの求愛の歌を思わせるようなエロティックな面と、月の障りを詠むあたりの、和やかで打ち解けた様子が感じられる。それを受けて、そうよそうよ、年月が経過しすぎて待ちきれずに月が出てしまったのですよと応えるミヤズヒメも同じように和やかで、しかし私の方こそ待

ちわびたのですよとも言いたげで、互いに待ちわびたことを訴えながら、待つ辛さと再会の喜びを分かち合っているような感じがする。離れていても互いに大切な存在として再会を心待ちにしていた二人が和やかに打ち解け再会の喜びを分かち合って結ばれるのである。ここでは、オトタチバナヒメとの間のように離別の痛みとその面影を一人胸に抱くだけでなく、互いに心待ちにしていた相手と再会し喜びを分かち合う姿が描かれている。自らの内側により対象としている相手の内側で、自分自身もよい対象としているという実感を分かち合っているのである。

相手の内側で＜私＞がよい存在として認められていることを、死別したオトタチバナヒメとの間でも、離別と再会を繰り返したミヤズヒメとの間でも実感を伴って認識している。＜私＞にとって大事な相手からの存在を認められるこのような言（ここでは歌）のやり取りによって生まれる、自らがよい存在であるという実感を伴った認識が、未知の孔が未知であることの不安に耐えさせ、未知のままに保ち、相手からの新しい未知の言を待てるようにするのである。

西征でイヅモタケルを討った時の歌が、自ら能力を獲得した喜びを示しているとしたら、ここでの歌は、相手の内側で自分自身がよい対象として存在し、それを分かち合える喜びを示している。天皇によって＜語り出されたコト＞から芽生えた「相手の内側でどのように自分が存在しているのか」という「相手にとっての私の存在」のテーマは天皇ではなく、東征の実質的な出発点であり帰着点である尾張において、ミヤズヒメとの間で乗り越えられる。いわばこのような絶頂に居る高揚感が、自らの力を過信して、＜私を超えるモノ＞を想定しなくなることにつながるかのよう、ここから伊吹山の神を「取り」に行くことになる。

5. 景行記のあらすじ（3）

命は「この山の神は素手でじかに討ち取ってやろう」と仰せになって、山をお登りになった時、牛のように大きな白い猪に出会った。その時、命は言挙げして、「この白い猪の姿をしているのは、山の神の使者であろう。今殺さなくても、帰る時に殺してやろう」と仰せになって登って行かれた。すると山の神ははげしい雹を降らせて、ヤマトタケルノ命を打ち感させた。この白い猪に化身しているのは、使者ではなく山の神自身であったのを命が言挙げなさったためにまどわされたのである。そこからお立ちになって、当芸野にお着きになり「私の気持は、いつもは空をも飛び翔って行こうと思っていた。ところが今は私の足は歩けなくなり、道がはかどらぬようになってしまった」と仰せになった。それから少し進むと、ひどく疲れておられるので、杖についてそろそろとお歩きになった。そして、尾津崎の一本松のもとにおいでになられたところ、先にお食事を召し上がった時に、そこに忘れていかれた御大刀が、なくならないでそのまま残っていた。そこで、

尾張に 直に向へる 尾津の崎なる 一つ松 あせを
一つ松 人にありせば 大刀佩けましを 衣き
せましを 一つ松 あせを
（尾張国に直接向かい合っている尾津の崎に立っている一本松よ、お前よ。一本松がもし人であつたら、大刀を佩かせようものを、着物をきせてやろうものを、一本松よ、お前よ）

と歌った。そこからお進みになって、三重村においてになった時、「私の足は三重の勾餅のようになって、ひどく疲れてしまった」と仰せになった。

そこからお進みになって能煩野においてになった時、故郷の大和を偲んでお歌いになった。

倭は 国のまほろば たたなづく 宵垣 山隠れる
倭しうはし
（大和国は国々の中でもっともよい国だ。重なり合って、宵い垣をめぐらしたような山々、その山々に囲まれた大和は、美しい国だ）

またお歌いになった歌は、

命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の くま
白樹が葉を うずに挿せ その子
（命の完全な人は、平群の山のくま榎の葉を髪に挿して、命を謳歌するがよい。みなの方よ）

この二首は、国思歌である。またお歌いになった歌は、

愛しけやし 我が方よ 雲居立ち来も
（ああ、なつかしい我家の方から 雲がわき起こって来ることよ）

これは片歌である。この時、御病気が急に切迫した。その時お歌いになった歌は、

嬢子の 床の辺に 我が置きし 剣の大刀 その大刀はや
（少女の床のそばに、私が置いてきた大刀よ、ああ、あの草薙の大刀よ）

と歌い終わってすぐにお隠れになった。

そこで大和におられた后や御子たちは、みな下って来られて、御陵を造り、そのまわりの田の中を追い回って、泣き悲しんで歌われた歌は、

なづきの田の 稲幹に 稲幹に 旬ひ廻ろふ 野老
蔓
（お陵の近くの田に生えている稲の茎に、その稲の茎に追いまわっている野老の蔓のようなわたくしたちよ）

すると命の魂は、大きな白い千鳥となって、空に飛

び立って、海に向かって飛び去った。そこで后や御子たちは、あたりの小竹の切り株で足を切り傷つけても、その痛さをも忘れて泣きながらおっついていかれた。

この時歌った歌は、

浅小竹原 腰なづむ 空は行かず 足よ行くな
(低い小竹の原を行こうとすれば、腰に小竹がまといついて歩きづらい。鳥のように空を飛ぶこともできず、足で歩いて行くもどかしさ)

また白千鳥が飛び立って、海岸の磯にとまっている時に歌われた歌は、

浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ
(浜の千鳥は、歩きやすい浜伝いには飛ばないで、岩の多い磯伝いにとんでいくことだ)

この四首の歌は、みなヤマトタケルノ命の御葬儀に歌った。それで今に至るまで、それらの歌は天皇の御大葬の折に歌うのである。

さて白鳥は、伊勢国から飛び翔って行って、河内国の志幾にとどまった。そこでその地に、御陵を造って、御魂を鎮座おさせ申した。そこでその御陵を白鳥御陵という。しかし、白鳥はまたそこからさらに空高く天翔って飛び去っていった。

6. 景行記のあらすじ (3) の考察

(1) <私を超えるモノ>を軽視する「言挙げ」

ヤマトタケルは、ミヤズヒメのもとに草那芸剣を置いて、伊吹山の神を素手で「取り」に行こうとする。そして、言挙げが原因でヤマトタケルは死に向かっていく。ここでの言挙げはどのような意味をもつのだろうか。「言挙げ」という言葉は、「何かを言葉に出していくこと」(西郷, 2005)である。鳥谷 (2011) によると本来言挙げは「祭祀空間において戦闘などの非日常行為としておこなわれる、活動や支配領域の確定の意図をもつ言語的呪術行為」であるという。寺川 (2012) は、ここでの言挙げについて、言向けと対比させて、「計算された説得的発言によって神をく言に従わせる言向け>」に対して「望ましい結果を計算しないで発言者の思いを直接的に表明するといった一面をもち、必ずしも説得的ではない発言」と捉えている。そして、伊吹山は神の住むべき場所であり、言向けの必要がないにもかかわらず、「神の領分」を侵し、神を和らげずに素手で殺すという言挙げが「神の怒りを買っただけでなく、自らの心の中を見透かされ、そうした不用意から落命」したとみる。また、青木 (1989) も、この白猪は、言向けの対象である荒ぶる神ではなく、この場面は「自らの意志を超えた神的なものとの<出会い>」であり、その神聖な白猪を対象に言が発せられたことが禁忌であったのであり、死につながったとみる。さらにこの言挙げは、神を使者と誤認しているのであり、

「誤認が言挙げという行為によって表明されたこと」(吉井, 1977) がヤマトタケルの死につながっていく大きな原因であるという理解もある。

このようにすでにヤマトタケルには、「言向け」の意識はない。また、伊勢大神の加護を必要とせず、独力で、神を取ろうとしていること自体、人の力を超えた神という存在を軽視している。孔という比喻を使うなら、どのように私たち人間が力を持つかが、私たちの現実に対する認識には孔があいている。神というのは、現実私たちの想定を超えるものであるという認識を示すものだといっているだろう。ヤマトタケルは自らの力を過信することでその認識を忘れているかのようである。そして、筆者が思うには、そのように過信するのが人間なのである。しかし、その在り方が死につながったのである。

(2) 再会を待つ者への思慕

言挙げによってヤマトタケルが衰弱してゆく様子が描かれる。そんな苦しい道行の中、東征への往路で、尾津の崎の一本松のもとに置いていった大刀がなくならずにあったのである。そこで「一つ松」の歌が歌われる。この歌には自らを過信して独力でというのは対照的に、人との再会を求めながら、それが得られないものの寂しさが表現されていると思う。土橋 (1972) は、「直に向かえる」というのは必ずしもミヤズヒメのことを指しているのではないというが、物語の流れから見て、筆者は、尾張と尾津に離れ離れになりながらミヤズヒメとヤマトタケルはまっすぐ向き合っていて、ミヤズヒメの面影を抱いて歌っていると思う。ここに歌われているのは、大刀を守って、自分を待っていてくれた尾津の松であるが、松はく待つ>である。この<マツ>という言葉が契機となって、ヤマトタケル、ミヤズヒメ、松の間で対称性原理が働いて、それらが等価となる。大刀を守って待っている松は、常陸に向かったヤマトタケルと再会した時に「君待ちがたに」と詠んだ、ヤマトタケルを待ちかねたミヤズヒメであり、また、今も尾張で草那芸剣を守って待っているミヤズヒメである。と同時に、その松はヤマトタケル自身である。尾張から離れ、尾という言葉と共有して対になった尾津という土地にいる自分である。大刀を佩かずに来てしまった自分が、この一つ松に再会したように、ミヤズヒメと再会し、再び草那芸剣を佩くことを待ち望んでいる自分である。そして、その再会をここでどのように一人願っている自分がこの一つ松である。大刀を佩いていない一つ松は、草那芸剣を佩かず弱ってしまった自分自身であり、その一人になった自分自身を具体化している松に対して、労わるように「大刀佩けましを」「あせを(吾兄を)」と呼びかけているのだと思う。

このようにこの歌は、自らを過信したことにより、草那芸剣を佩かず弱ってしまった自分自身への後悔とそれを守って待っているであろうミヤズヒメへの思慕と再会を待ちわぶる思いが込められていると思う。こ

のように再会を必要としている人への思慕がここで示される。

（3）^{くにしの}国思ひ歌と辞世の歌

いよいよ衰弱し、死を前に大和を偲ぶ歌を歌う。一首目の歌は、もとは国讃め歌であったものがこのヤマトタケルの望郷の歌として採用されたという（土橋,1972）。青々と茂った山に囲まれた素晴らしい国である故郷の面影を抱いている。岩橋（2013a）で、スサノヲが詠んだ「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」という歌に表現されている居場所を獲得する喜びについて触れたが、このヤマトタケルの歌も、青垣に囲まれた故郷の大和が素晴らしい居場所であったことを示していると思う。そしてその場所に戻りたいと思ひながら、「しのふ」のである。「しのふ」とは、「遠くにあるもの（空間的・時間的に）を思慕すること」（土橋,1972）である。二首目の歌は、「この歌は本来平群山の山遊びにおける老人の歌で、若者に対して青春を楽しみ、活動することを勧め訓す歌であろうと推測される」（土橋,1972）という。生命力が盛んな若者に対して、死んでゆく身である自分自身が、その生命力を謳歌するように勧めるのである。故郷の若者たちの喜びを祝福するような眼差しが感じられる。三首目は、片歌となっているが、三首一括して国思ひ歌と捉える方が合理的である（土橋,1972）。雲居は、「家人または故郷の靈魂の姿」（土橋,1972）という。懐かしいわが家が盛んであることを願い幻視しているのだろうか。

伊澤（2003）は、ヤマトタケルの道行の地名の順序が混乱していることから、彷徨っているのであり、ヤマトタケルは、「文献に登場する最初の行路死者」であるという。これらの国思ひ歌は、それを歌うことで、故郷の国、妻子、家の生命力が盛んになり、「その力が自分にも及んでくれと願って歌った」という。その説をとるか否かは別として、行き倒れの死を前にして故郷に戻れないことを認識しつつ、単に戻れないことの悲しみではなく、彼の「しのひ」は故郷の生命力の盛んなことを自分の喜びとするような穏やかな思慕なのである。

そして、最後に再びミヤズヒメとそのもとに置いてきた草那芸剣について歌うが、それが辞世の歌となる。最後に「その大刀はや」と歌う。足柄の坂の上でオトタチバナヒメのことを偲んで「あづまはや」と三度嘆息したが、この「はや」は「過去のもの、遠くにあるものに対する断絶感・距離感を含む激しい感動」（土橋,1972）の表現であるという。そして、「その大刀はや」は「死に直面した倭建の草薙剣に対する強い愛惜の気持ちと解される」（土橋,1972）という。

結局、ミヤズヒメとは往路で再会を約束し、帰路でその約束を果たし、あの打ち解けた互いの内側により自分があることを認識しあう歌を交わしたが、再び離別する。「一つ松」の歌で、そのミヤズヒメとそのもとに置いてきた草那芸剣との再会を求めて、尾張で同じ

ように自分との再会を待っているミヤズヒメを思慕する。しかし、もう会うことはできず、ミヤズヒメと草那芸剣のよい面影とそれとの断絶感と愛惜を抱いて亡くなってゆく。オトタチバナヒメとの死別は相手の死によるものであった。ここでは自らの死による死別であり、それも対になっているであろう。いずれにせよよい対象との離別は避けられない。

いくらよい面影を抱けたとしても、いや、よい面影を抱けたからこそ、この断絶感と愛惜に耐えなければならぬのが命ある人間なのである。そしていくらかその断絶感と愛惜を癒すのは、ヤマトタケルの国思ひ歌で歌ったような、自分に続く若者の生命力を自分のことのように喜ぶことなのであろう。

（4）異なるものを分ける境界と一つになる「なづむ」思い

ヤマトタケルの死の知らせを聞いて大和から后や御子がやってくる。居駒（1991）は、ここで歌われる四首の歌は、天皇の大御葬で歌うと記述されているように、この場面は葬送儀礼の起源を示し、四首は葬歌であるという。居駒（1991）によると、二首目、三首目の歌は、「腰なづむ」という言葉があり、「なづむ」は、「邪魔するもののために難渋して進めないさま」を示しており、「浅小竹原」や「海処」という場所で難渋して進めないさまを表しているという。また、「なづきの田」の一首目も、また、「浜つ千鳥」の四首目も、「行き難さ」というイメージを歌っているという。そして、歌われている場所である「なづきの田」「浅小竹原」「海処」「磯」は、行き難い境界の場所であり、「この境界の場所の表現によって、四首は死者を他界に送る歌になっている」という。このように他界に向かって境界領域を渡っていく死者と別れ難く、後を追いつつ追いつき、死者を送るのである。また居駒（1992）は、「なづきの田」から「磯」までは、死者がそれらをたどりながら他界に行く通路を歌っているといい、これらの歌はあの世へ去ってゆく道行を歌った＜死者のうた＞—死者に成り代わって生者が詠むうた—とも読めるという。この四首の葬歌は、歌の主体が死者とも、生者とも読める。このように＜死者のうた＞は、死者の側から生者へ、生者の側から死者へ、というように、うたい手の立場がしばしば入れ替わるというように歌の主体が未分化なあり方をしているという。「なづむ」思いが契機となって、生者と死者で対称性原理が働いているのである。別れ難さ、他界への行き難さ、送り難さ、つまり「なづむ」という同じ思いを死者と生者は共有するのである。

そして一方の死者は、生者との別れのためになづみながら境界を越えて行き、もう一方の生者もなづみながら追いかけて、こちらにとどまるのである。このように歌われることが、死者にとっての鎮魂となり、それがまた生者にとっての慰めとなる。

このように死者と生者は異なる。そして共に居ることとはできず、もう思いを通わせることができなくなる。

しかし、歌う者の心の中で、歌う主体と対象が未分化なまま、境界領域でなづむ体験を共有している。異なるゆえにもう思いを通わせることができないという思いを別れるもの同士が、通いあわせているのである。そして生者は、通いあわせられない思いを抱きながら、異なる場所で<私>と同じように通いあわせられない思いを抱いているよい対象である死者の面影に支えられながら、なづみつつ、自分の場所を生きるのである。

7. まとめ

ヤマトタケルは、<モノ>神祕性情をもっており、天皇によって<語り出されたコト>により、自らの内側にある<私を超えたモノ>である欲動を制御する必要がある。西征の命令として<語り出されたコト>によって欲動を制御しつつ、外界に対処する能力を獲得する。<語り出されたコト>の範囲を超えながらも、そのコトが意図している方向性から逸脱することなく、獲得した能力をもちいて外界の<モノ>を制御する。このように主体性を発揮する<私>が機能し始める。

次に東征の命令として<語り出されたコト>によって「相手の内側での私の存在」についての問いが生まれる。これは、相手の関係性についての真意といううつろな孔についての問いかけである。

東征では<語り出されたコト>を現実化してゆくが、主体性を発揮する<私>は<私を超えるモノ>の軽視につながり、神を神とも思わない態度をとることでヤマトタケルは死に向かう。

また、「相手の内側における私の存在」についてのテーマに関しては、東征の道行で、出会いと離別、再会を繰り返すヒメたちとの間で交わした歌や言によって、自分自身が相手の内側により存在しているところを実感することによって、乗り越えられる。しかし互いにより存在と認識しあった者同士であっても離別がやってくるのであり、離別せざるをえないことに対する「なづむ」思いを共有しながらも、異なる存在として離別する。

以上が物語に即した内容である。

これらの物語を通して景行記では、垂仁記で誕生した<私>がさらに形成される過程で以下のことが示されている。<私>の内側にあるモノである欲動を<語り出されたコト>によって制御すること、<語り出されたコト>に対して主体性を獲得すること、<語り出されたコト>の背後に<私>に向けられた「相手の内側での私の存在」という問いを発見すること、その問いに対しては、離別と再会を繰り返して互いにより存在として認識してゆくことにより乗り越えられること、<私>に対して<私を超えるモノ>が存在することとそれを軽視することによる死、どのようなよい対象であっても<私>は離別せざるをえないことである。

注1：ここで使用しているコトをいう語は、岩橋(2014a)に示したように、語り出された言は、言に宿る<モノ>の呪的能力によって現実化し事となるとい

う言事一致の万能的思考のもとで使用される言のことである。しかし、景行記ではすでに天皇の言は必ずしもそのような呪的能力を備えたものとしては描かれていない。しかし、天皇により語り出された言葉に従い現実化すべき事であると捉えているという場合はコトという表記を用いることとしたい。

注2：神霊を表している場合は<モノ>と表記する。はじめは神霊を表していた<モノ>ということだが、必ずしも神霊であるとは限らないが、私たちにとっては未知なものを表している場合にはモノと表記する。

文献

- 青木周平(1989)：倭建命東征伝承と「言挙」, 古事記年報, 31, 114-134.
- 榎本福寿(1992)：言向と倭建命の討伐, 古事記年報, 34, 69-107.
- 畠山篤(2011a)：倭建命の熊曾征討物語の生成(上), 弘前学院大学文学部紀要, 47, 37-57.
- 畠山篤(2011b)：倭建命の熊曾征討物語の生成(下), 弘学大語文, 37, 7-28.
- 居駒永幸(1991)：境界の場所(上)ーヤマトタケル葬歌の表現の問題としてー, 明治大学教養論集, 242, 19-38.
- 居駒永幸(1991)：境界の場所(中)ー死者のうたの発生、そして挽歌へー, 明治大学教養論集, 242, 19-38.
- 稲生知子(2010)：「古事記」に於ける倭建命ー「言葉」をめぐる問題からー, 古代文学, 50, 101-114.
- 岩橋宗哉(2013a)：「対象喪失」とその乗り越えに向かう神話としての古事記上巻(Ⅰ)ー「不在の現実」についての「見るな」禁止から「居場所」の形成へー, 福岡県立大学心理臨床研究, 5, 3-12.
- 岩橋宗哉(2013c)：「対象喪失」とその乗り越えに向かう神話としての古事記上巻(Ⅲ)ー「異類性」についての「見るな」禁止から「対象喪失」とその乗り越えへー, 福岡県立大学心理臨床研究, 5, 21-27.
- 岩橋宗哉(2014a)：境界領域で<私>が形成される物語としての古事記中巻(Ⅰ)ー神武記；万能的思考によるコトへの信念とそれを維持するための三項構造ー, 福岡県立大学心理臨床研究, 6, 5-16.
- 伊澤正俊(2003)：「思国歌」「片歌」の構造と意味ー行路死者ヤマトタケルの視点からー, 専修国文, 73, 1-24.
- 鳥谷知子(2011)：古事記の言ー「言向」「言挙」への展開ー, 學苑, 843, 1-17.
- 神野志隆光(1975)：「ことむけ」攷ー古事記覚書ー, 国語と国文学, 52(1), 18-28.
- 森昌文(1985)：ヤマトタケル論ー「言」への展開ー, 古代文学, 25, 77-85.
- 西郷信綱(2005)：古事記注釈 第六巻, ちくま学芸文庫.
- 佐藤正英(2003)：日本倫理思想史 増補改訂版, 東京大学出版会.
- 鈴鹿千代乃(2011)：カムヤマトイハレヒコからヤマトタケルへー「ヤマト」の誕生・拡大・完成ー, 國學院雑誌, 112(11), 282-295.

寺川真知夫 (2012)：伊弉岐能山の神と倭建命－言向・言拳を視野に入れて－. 万葉古代学研究所年報,10,17-48.

都倉義孝 (1981)：「古事記」におけるスサノヲとヤマトタケル－辺境を正化し彼方へ去る神と人－. 早稲田商学,290,246-225.

土橋寛 (1972)：古代歌謡全注釈－古事記編－. 角川書店.

吉井巖 (1977)：ヤマトタケル. 学生社.